

支那音韻の三大變

滿田新造

支那の音韻は大體に於て三變して居る、即上古時代先秦時代、中古時代漢代以後唐代の中頃迄、近世時代唐代の中頃以後の三時期を分けることが出来る、此事を成るべく通俗的に説明しやうと思ふ。

第一章 上古韻

上古時代即先秦時代の音韻が後世と異なつて居ることは清代學者の研究に依つて明瞭になつた。しかし其發音は殆ど後世に傳はらぬと言つてよい、隨て最初に其發音を定めて置いて後世との差異を論ずることは出来ぬ。唯詩經楚辭其他の古書に見えて居る韻文の押韻を後世詩賦の押韻と比較して、二者の間に色々の相違があることを知り、其結果後世の發音を本として上古時代の發音を推定するのである。

一 上古押韻の特徴の概観

先秦代の押韻と中古時代の分韻の重なる相違を擧げて見れば下の如きものである。(古韻分部は段玉裁の六書音均表に依り、中古時代の發音は便宜日本漢音を代表として説明するから支那原音と相違するかも知れぬ。)

(一) 廣韻(中古音)の吟韻(日本漢音「アイ」)の文字例へば來哉海倍殆(同諧聲の文字を含む以下同じ)等及び尤韻(「イウ」)の一部の文字例へば尤裘疚又牛等は上古代には同一押韻部に屬した(段氏第一部、日本音「オ」の韻)

(二) 廣韻の蕭韻(「エウ」)豪韻(「アウ」)等の一部の文字例へば蕭條烏禱寶老道草等は上古に於て、尤韻(「イウ」)と同一部であつた(第三部「イウ」の韻)

(三) 廣韻の麻韻(「ア」)の一部の文字例へば家夏暇馬下瓜等は上古に於て魚虞模三韻(「オ」)の文字と同一部であつた(第五部「オ」の韻)

(四) 廣韻の覃韻(「タム」)の一部の文字例へば南耽男等は侵韻(「イム」)と同一部であつた(第七部「イム」の韻)

(五) 廣韻の庚韻(「エイ」)の一部の文字例へば泳兵景英明慶柄等は陽韻唐韻(「アウ」)と同一部であつた(第十部「アウ」の韻)

(六) 廣韻の先韻(「エン」)の一部の文字例へば田天年先千堅等は眞韻(「イン」)と同一部であ

つた第十二部「イン」の韻

(七) 廣韻の支韻「イ」の一部の文字例へば宜儀池皮猗爲等ば麻韻「ア」の文字と同一部であつた第十七部「ア」の韻

二 實例に依る説明

右の中最後の分部(第十七部)につき詩經から押韻の實例を舉げて説明する。

(邶、北門一二三章) 爲何爲何爲何爲何(爲の上古音「キ」)

(鄘、君子偕老一章) 珈佻河宜河(宜の上古音「ガ」)

(王、兔爰一章) 羅爲羅叱(羅の上古音「ラ」)

(鄭、女曰雞鳴二章) 加宜

(陳、東門之池一章) 池麻歌(池の上古音「タ」)

(陳、澤陂一章) 陂荷何爲沱

(小雅、菁々者莪一章) 莪阿儀(儀の上古音「ガ」)

(同、無羊二章) 阿池訛

(同、小弁一章) 羅何何

(同、裳々者華四章) 左宜

(同、鴛鴦一章) 羅宜。

(同、賓之初筵四章) 嘉儀。

(大雅、棫樸二章) 裴宜。

(同、皇矣六章) 阿池。

(同、鳧鷖二章) 沙宜。多嘉爲。

(同、抑五章) 儀。嘉磨爲。

(同、抑八章) 嘉儀。

(商頌、元鳥) 河宜。何。

右の中爲宜羅池儀は皆廣韻支韻の文字で中古音「イ」の韻であり、其他の文字は皆「ア」韻の音であるから、此儘では到底押韻の用を爲さぬ。「イ」の韻と「ア」の韻と押韻することは支那では勿論其他の國にもないことであるからである。所で各例の下に註した如く爲宜羅池儀を上古代には「ア」韻の音であつたと解釋すると、始めて善く押韻の目的が達せられるのである。

三 上古の押韻分部と廣韻の分韻の齟齬

上古の分韻と廣韻の分韻の齟齬は上古韻と中古韻との區別をする標準となるも

のである、廣韻に於ける同一韻の文字は必しも步調を一にして上古代の同一押韻分部に屬しない、同一韻の文字でありながら一部の文字は甲の押韻分部に屬し、他の文字は乙の押韻分部に屬することが少くない、下に實例を舉げて其有様を示す。

上第五部 居書女雨父固都土等……………
 韻廣 魚虞模三韻

華家牙叟舍馬下野夏等……………

韻廣 麻韻

上第十七部 化叱加嘉嗟麻等……………

宜儀池皮爲猗羅離等……………

韻廣 支韻

上第十六部 支斯知祇等……………

かやうの例には外にも少からずあつて、是實に上古中古の區別を附ける重要な點である。

第二章 中古韻

中古時代の分韻は最細かに廣韻に示されて居り、日本漢音等と善く一致するものである、廣韻は隋の陸法言の切韻の音韻組織を踏襲したものである、猶法言は切韻著作の際、晋代以後の韻書を參考して居る、次に中古韻は漢唐間の詩賦の押韻に現れて

居る、終に中古の發音を傳へたものは、(イ)漢唐間の佛典の梵語音譯、(ロ)日本吳音、(ハ)日本漢音、(ニ)朝鮮音等である。

一 南北朝唐代の韻

漢唐間の詩賦の押韻に關し大體二の時期を分けることが出来る、(1)漢晋代の押韻、(2)南北朝唐代の押韻である。廣韻では韻を細に分け、各韻目の下に詩賦の押韻に用ふる際、の同用獨用を註して居る、此同用獨用は唐代の押韻の標準となつたもの、又南北朝代の押韻と大體に於て同様のものである。

二 漢晋代の韻は中古韻なり

漢晋代の押韻と南北朝唐代の押韻を比較して見るに、前者は疎で後者は密である、細しく言へば、南北朝唐代に比してより多くの韻、廣韻の分韻に依るが、漢晋代の同一押韻部に含まれて居る所がある、けれども兩者共に同一の中古韻に屬して居る、何となれば前記上古韻の條の(三)に述べた分韻の齟齬は漢晋代の押韻にはないからである、即廣韻に於ける同一韻の文字が切々に離れて、漢晋代の二三の押韻部に分屬するやうのことはなく、同一韻の文字は步調を一にして悉く同一押韻部に屬して居る。

猶下に漢魏代の詩韻の實例を擧げて音韻變化の一端を示す、漢代の詩は一般に少

いことを斷つて置く)

(前漢卓文君白頭吟) 啼離筵爲(啼は後齊韻さなる)

(後漢蔡琰胡笳十八拍) 爲衰離時危悲虧宜誰知

(魏文帝秋胡行) 爲儀危知移

(同猛虎行) 儀知池

(魏曹植白馬篇) 馳兒垂差支

(同公宴詩) 疲隨差池枝移斯

(魏徐幹爲挽船士與新妻妻別) 離隨枝移馳知池

(魏阮瑀駕出北郭門行) 馳枝啼斯兒施皮離嘶貲規(嘶は後齊韻に變ず)

(魏何晏失題) 移彌池知

の諸例中、離爲宜儀移池馳垂差疲隨施皮は先秦代に於て皆「ア」韻の音「ラ」「ワ」「ガ」「ヤ」「タ」「サ」「ハ」等の音であつた、然るに右の實例を見るに此等は皆支韻等の「イ」韻の音と押韻されて居る、是に依て是等の文字は漢魏代には既に「リ」「キ」「ギ」「イ」「チ」「シ」「ヒ」等の音に變化し終つたことが明になる。

猶漢晋代の佛典の梵語音譯を見るに、唐代の新譯殊に玄奘の音譯のやうに精密で

はないが、矢張之と同種類の發音を示して居つて、上古の遺音などは到底發見するこ
とが出来ぬ、此點からも中古音であることが分る。

しかし漢魏代の押韻には時として先秦代の名殘を留めて居る、かゝることは保守
的惰性的の支那には是非あるべきことである、此等は例外の場合であるから、是を土
臺として漢魏音は先秦音と同一であるなど、結論してはならぬ、是は大切な事であ
る。

第三章 近世韻

唐代の中頃以後音韻變化が起つて近世音が段々發生した、此事は詞韻に明に現れ
て居る、詞は唐代の中頃から起つたもので、其押韻法は廣韻に註してある中古の押韻
法とは餘程異なつたものである、詳細は藝文第十年第二號、詞韻即晚唐音は近世音也
參照、今下に中古韻と近世韻の相違ある數點を擧げて見る。

- (一) 廣韻の齊韻祭韻(日本漢音、エイ)は近世音に於て「イ」の韻に變化して居る。
- (二) 泰韻(アイ)の一部の文字例へば外最等は「ウイ」「イ」の合口音に變化して居る。
- (三) 灰韻(ワイ)は「ウイ」に變化して居る。

(四) 歌韻「戈韻」は「オ」に變化して居る。

まだく色々あるが下の實例の説明に必要な箇條だけに止めて置く。

一 押韻の實例に依る説明

宋六十名家詞から數例を引用する。

歐陽脩六一詞

(踏莎行) 細轡水淚倚外[△]

(漁家傲) 水底墜寐起碎翠類意裏

柳永樂章集

(玉樓春) 貴侍計最對醉[△]

(蝶戀花) 細際裏意醉味悔悴[◎]

(長壽樂) 翠繫意媚醉被繼對[◎]

蘇軾東坡詞

(水龍吟) 墜思閉起綴碎水淚[◎]

(無愁可解) 世味底耳裏未利是你外醉[△]

の諸例の中、大多數の文字は支韻脂韻等の「イ韻」合口音は「ウイ」の音である、印の附けて

ないもの、其外は

(1) 齊韻祭韻の文字即細底計際繫繼閉綴は皆日本漢音「エイ」韻の音であり中古時代には獨用で決して他の韻とは押韻されてないものである。

(2) 泰韻の文字即外最[△]は日本漢音「アイ」の韻である、泰韻は中古時代には獨用で、他の韻とは通用を許してない。

(3) 灰韻の文字即碎對悔[◎]は日本漢音「ワイ」の韻、此韻は哈韻との通用は許してあるが、前記諸韻とは中古時代に於て決して通用は許してない。

かく中古時代に通用を許してない諸韻が、近世の詞韻に於て混同して通用押韻されて居るのは全く音韻變化の結果であつて、齊韻(エイ)、泰韻(アイ)、灰韻(ワイ)が三韻共、「イ」(合口は「ウイ」)の韻に變化して、支韻脂韻(中古、近世共「イ」)の音等と同一になつた爲である。

二 外國語の音譯の實例に依る説明

次に外國語の音譯に用ひられた歌韻(日本漢音「ア」)戈韻(「ワ」)の文字を、唐初の玄奘の西域記の梵語音譯と(中古時代)元朝秘史の蒙古語音譯(近世時代)から引用して、其變化を示す、先づ西域記の例は(梵語の綴りは簡略に従ふ)

刹那[○](極短時間) Kshana

踰繕那[○](一日軍行里程) Yojana

漢 文

提婆達多(人名) Devadatta

摩訶(大) Maha

佛陀駄婆(人名) Buddhadasa

迦葉波(人名) Kashyapa

逝多(林名) Jeta

頻毘沙羅(王名) Bimbisara

拘摩羅童子 Kumara

などで、那婆多摩訶婆羅陀駄波は皆歌戈韻の文字で、明瞭に a 韻の音を寫すに用ひられて居る。隨て中古音の a であること疑ない、然るに元朝秘史の方は

歌多勒

闊多勒 (動く) Kōtol

那可兒從者 Nōghor

朶羅納(東) Dorona

火敦星 Odon

戈劣格孫(野獸) Gōrogeson

沙里 (試る) Sori

沙那思(聞く) Sonos

朶羅安(七) Dologhan

火兒臣(周圍) Orchin

などで、歌戈韻の文字歌多莎鎖那可朶羅火戈は皆 o (ö) を含む (Schmidt の蒙古辭書に依る) 韻の音を寫して居る、是即近世音である。猶近世音の詳細に關しては藝文第九年第十二號「中原音韻分韻の概説」を讀みたい。(完)